

学

園

長

だ

よ

り

第25回

ひとつが終わり、ひとつが始まる

愛知淑徳学園理事長・学園長

小林素文



なごやであそび隊（東山動物園でのえさやり）

今年、平成最後の卒業式・入学式となりました。

平成は「地平らかにして天成」「すなわち「万物が榮え、世の中が平穏なこと。天災などに見舞われることなく自然が穏やかなこと」を願い名づけられましたが、歴史に残る大きな天災が二つありました。

阪神大震災と東日本大震災です。

古来、日本はさまざまな災害に見舞われてきましたが、力強く立ち直って来ました。

徳川時代、江戸の町は何度も大火に見舞われ大きな被害を受けましたが、火除地を設けたり、火消制度を充実したりして再建をし、当時の世界最大の都市へと成長しました。

平成の二つの災害から、何かが生まれたのでしょうか。

*

二十四年前の阪神大震災は「ボランティア元年」と言われます。それまでは、「ボランティアは一部の人の自己犠牲的な行為」のイメージでしたが、阪神大震災の大惨状を知った若者たちが「何か手助けをしたい」との想いで全国から集まり、瓦礫撤去や、炊き出しなどの活動をしました。

連日報道された「被災地の痛々しい姿と、そこで懸命にボランティアをする若者の姿」に、深い悲しみと共に希望を感じたものでした。

ボランティアはその後広がりを見せ、愛知淑徳大学にも「コミュニケーション・コラボレーションセンター（CCC）」が開設されるようになりました。現在のCCCでのボランティアは、東日本大震災で愛知県に住むようになった家族の子供たちを支援する「なごやであそび隊」（写真）、障がい学生を

支援する「あすてく」、「名古屋コーチンもりあげ隊」など多岐にわたっています。

*

東日本大震災では、個人で支援するボランティアだけでなく、組織で支援するNPOの活躍がさわっていました。

今も続く、その一つを紹介いたします。

「二度と悲劇を繰り返さないように、津波到達ラインに桜を植樹していこう」との想いで、桜を植樹していくNPO「桜ライン三一一」の活動です。

活動に賛同する人や団体からの寄附で購入された桜の苗木が、ボランティアの手で毎年植えられていき、今では一四〇〇本以上になったとのこと。しかし、それはまだ全体のハバーセントにすぎないということです。

「桜ライン三一一」の地道な活

動がこれからも続いていき、何十年か先には、見事な桜並木に花が咲き、亡くなった人たちのそれぞれの想いが伝えられていることを祈りたいものです。

*

大災害の悲惨な光景を目の当たりにした時に誰もが抱く、「何か役に立つことがしたい」との素朴な思いが、平成の時代にボランティアやNPOなど様々な形で、誰もが参加しやすいになりました。しかし、津波で一瞬にして町が流され、大切な人を失った被災者のことを思うと、八年たった今も心が痛みます。せめて、当たり前の生活が当たり前前に続くことのありがたさを実感させてくれたことを忘れることなく、令和の時代を歩んでいきたいものです。